

「清くすることができる方」（ルカによる福音書五章一二〜一六節）

1 重い皮膚病

会堂に集まっつての礼拝、七週間ぶりの再開です。感染症との社会全体の戦いに教会も協力しながら、また私ども自身がかからないように、できるだけその危険を減らすために、しばらくの礼拝休止の期間において、今日を迎えています。終息までもう少しかかります。怠らずに気をつけ、それぞれに、可能なかぎり、教会の働きにあずかりたいと願っています。

ルカによる福音書の学びもすでに六章に入っていました。今日は一章戻って、第五章です。

イースターのあと、イエスのガリラヤ伝道を、ルカによる福音書で辿っていたのですが、どういうわけか一箇所飛ばしていました。五章一二〜一六節です。今日はそこを改めて取り上げることにします。聖書の見出しは「重い皮膚病を患っている人をいやす」となっています。

この「重い皮膚病」という言葉について、この機会に少し申し上げておいたほうがよいと思います。この言葉は、日本では、明治時代の文語訳聖書（一八八七年）から戦後の口語訳（一九五四年）、そして新共同訳（一九八七年）まで「らい病」と訳されてきました。これが同じく新共同訳で「重い皮膚病」と訂正されたのは一九九六年のことです。一番新しい聖書協会共同訳（二〇一八年）は「規定の病」と訳されています。今後これで行けるかどうかはさておいて、私どもとしては、いま使っている訂正された新共同訳に従い、重い皮膚病と読みます。

さて今日の箇所には、この重い皮膚病を患っていた一人の男がイエスによって癒やされたことが伝えられています。イエスの宣教のはじめの頃の出来事です。二人の出会いは、次のように始まっています。

イエスがある町におられたとき、そこに全身重い皮膚病にかかった人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った（一二節）。

いま私は一人の男が癒やされた、つまり「癒やし」という言葉を使いましたが、聖書もこれを癒やしと見えています（一五節）。

ただイスラエルでは、遠く旧約の昔から、もちろんイエスの時代も、この病気は他の数多くある病気の一つとしては受けとられていませんでした。むしろ神の怒り、憤りの結果（民数二二・九〜一〇、列王下一五・五）と考えられたり、また宗教的な穢れ（汚れ）の問題と見なされていたのです（レビ一三、一四章）。

重い皮膚病と訳されたもののヘブライ語は「ツアラアト」と言います。これには（むち）とか（こらしめ）という意味があるとも言われます。ただこれは革製品や服につく「かび」の意味でも使われていますし、今日の医学から見ても、ハンセン病だけでなく、軽いかぶれなどもふくむ広い意味の皮膚病のことのようです。しかしイスラエル

では、長い間、いま申し上げたように、穢れ、つまり衛生上ではなく、宗教的にきたないものとして忌み嫌われ、病人が差別を受けていたことは、皆さんも、ご存じのことだと思います。

彼らは、神の聖なる民、その共同体から閉め出されていました。家族からも離され、町の外で（宿営の外で）、荒野や砂漠の洞窟に、ひとり暮らすことを余儀なくされていました。先日昔の映画ですが、ベン・ハーをNHKでやっていて、主人公のベン・ハーの母と妹が「死の谷」という洞窟の生活を余儀なくされていたシーンが何回かありました。彼女たちがイエスの十字架の血潮で癒やされるというのが映画の一つのクライマックスです。

旧約聖書、レビ記一三、一四章には、この重い皮膚病に関するさまざま掟が書いてあります。その一つに、彼らが町に入るときには、「衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆（おお）い」、ですから自らあえてひどいかっこうをして、歩くときには、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と大声で叫んで、ほかの人が知らずに、遠くからでも彼に触れることのないようにしなければならぬ、というのがあります（一三・四五）。彼らの苦しみは、たんに治癒が困難な、重い病気にかかったというだけではありません。ユダヤの宗教、その社会が、病気に与えたその意味によって増し加えられていたのです。たんなる病気ではなく、それを理由に差別される、いわば社会的な病気でもあったのです。

2 御心ならば

さてこの重い皮膚病を患った人として、町の外に住むことを余儀なくされていた彼が、どのようにしてイエスと出会うことができたのか、今日の箇所では詳しいことは分かりません。

大きく言えば、イエスの宣教の広がりの中に、この男はとらえられていたということ、人びとが目を向けない、みんなが向けなくていいと考えているところ、人とも神とも交わりから断たれていると見えるところ、そのようなところも、イエスの眼差しから決してはずれていないということ。重い皮膚病も、イエスとの出会いを妨げるものではありません。

この男の願いを、もう一度、振り返ってみます。

主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った（一二節）。

なるほどイエスの宣教の広がり、恵みの射程が、この男をとらえ、新たな道へと導いていったことは確かです。しかしまたこの男の「信仰」も、ここから見るとつてよいように思います。

いまお読みした、この男の願いについて、願っていることが何か、はっきりしないと考える人もいます。逆にここに、なるほど信仰という言葉はないものの彼の信仰が現れていると見る人もいます。私は彼の信仰をここに見たいと思います。

彼は主よ、と呼びかけ、ひれ伏します。そして、御心ならば、と言っています。「御

心ならば・・・おできになる」。 「御心ならば」は、そのまま訳せば、主よ、あなたが欲するならば、です。つまり彼は、あなたのご意志、それにすべてはかかっていると告白し、それに信頼を寄せるのです。あなたにはおできにならないことは何も無いというのです。神の欲することは何か、それが何よりも問われなければなりません。従うために問われなければなりません。それを第一に問題にすること、それが彼の信仰です。

しかし神の御心にすべてはかかっているとすれば、すべてが自分の思い通りになるということにはなりません。とはいえ、この男の願いから、本当に清めていただけるのだろうかという不安な思いは響いてこないように思います。それほどの信仰の言葉を聞くのです。

もう一つ重要なことは、この男が、イエスを「清くすることができ方」として呼んでいることです。この後の展開の中で明らかになるように、重い皮膚病の人が直ったかを調べ、清いと言いつ渡すのは、あくまで祭司の役割でした。それをこの男も知らないわけではありません。しかし男は、清めてくださるのは、イエス様、あなたですと告白しているのです。

3 清めてくださる方

イエスはこの男の願いに応え、癒やし、清めてくださいます。

イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われるとたちまち重い皮膚病は去った。イエスは厳しくお命じになった。「だれにも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい」(一三〜一四節)。

イエスの言葉、「よろしい。清くなれ」は、重い皮膚病の人の言葉をそのままくり返したものです。「わたしは欲する、清くなれ」です。イエスが彼の願いを受け入れたということなのです。

ところで「清くなれ」とイエスは語ったわけですが、実際にイエスがしたことは癒やしでした。「重い皮膚病は(彼から)去った」、この「(から)去った」悪霊が去るという意味でも使われる言い回しです。つまり、重い皮膚病という病気が、彼から出て行った、直ったということです。

ここは私は大事なことだと思っています。つまりイエスはなるほど「清くなれ」と言っているのですが、実際のところ、癒やしているのです。病気をなおしているのです。イエスは、言い換えれば、重い皮膚病を特別なものとして見ていないということです。むしろ、一つの病気として、当時病気も悪霊の仕業とも考えられていたわけですから、いづれにせよ、一つの病気として、肉体の病として見ているということなのです。

人びとは、社会は、またとりわけユダヤの宗教の指導者たちは、重い皮膚病を、一つの病気に過ぎないとは見ていませんでした。宗教的な穢れとして、あるいは神の怒りの結果として見ていました。イエスはそうではないのです。他の数多くの病気の

つとして見ているのです。

今日でも、病気はしばしば、その社会的な意味と関連して見られ、それが差別を生んでいます。コロナでもそうです。コロナ病棟で働く看護師さんの家族、子供が、学校で差別されたり、いじめられたりするという報道もありました。病気に対する無知と不安が原因の一つです。だれでもなる一つの病気として見なされず、そこに、社会的な偏見であったり、差別であったり、入り込んでくるということです。くり返し申し上げます。イエスは、重い皮膚病の人を、穢れている人とは見ませんでした。病気を病気として見て、癒やしたのです。

ただ当時の社会で、重い皮膚病が直ったから、それでOKというような事情にはありませんでした。イエスも、彼を癒やして、そのまま家に帰ってよろしいとは言いませんでした。「行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい」と命じたのです。宗教的な穢れの病気、社会的な病気であると見たからでは、もちろんありません。

むしろイエスは、彼が、当時の社会の正規の手続きをへて、元の生活に戻ることを望んでおられるのです。本当に清めることのできる方、救うことのできる方が、彼をこのようにして清めてくださったのです。

「イエスが手を差し伸べてその人に触れ」たことも注意しておきたいことです。重い皮膚病の人に触れてならないという掟はありません。しかしレビ記一三章にあったように、この病気の人自身が自分に触れないようにと叫ばなければならなかった。当然病人に近づき、さわったりすることを、人はしませんでした。その意味でここで触れているイエスはモーセの掟を破っているとも言えます。しかしイエスはそのようにして、この男との社会的に隔てを越えて、直接の連帯に生きることを表明していると言ってもいいのです。皮膚病にさわることは、実際的にも、当ても決して安全なことではないと思います。しかし「その人に触れる」ことは、イエスにとって、この男を徹底して受けとめるということを意味していたのです。この重い皮膚病を患った男の病気の苦しみを、差別の苦しみを自らも引き受けることを意味したのです。癒やしの力がこの男の中に入り込み、重い皮膚病は、彼から出て行った。彼は癒やされたのです（イザヤ五三・五、他）。

重い皮膚病に関して、さまざまの掟が書いてあるレビ記一三、一四章、とくに一四章は「清めの儀式」のことが書いてありますが、それは病気が直り、清められることが前提です。しかし旧約聖書で直った例は二つだけです。一人は、アロンとモーセの姉ミリアム（民数一二章）、もう一人はシリアの軍司令官ナアマン（列王下五章）です。申し上げてきたように、旧約では、重い皮膚病は神の裁きであり、回復するためには、悔い改めと罪の赦しが必要だと考えられていました。しかし今日の箇所を示されているイエスによる重い皮膚病の人の癒やしでは、悔い改めも罪の赦しも書いてありません。悪いことをしたから神の罰として病気になったのではないからです。むしろ明らかになっているのは救い主イエスの力です。イエスはこの男を死の力から解放し、清め、新しい命を与え、御霊によって生かし、この地上の生活を祝福してくださいのです。私どももまたイエスをこのような救い主として告白し、従い、歩んでまいりましょう。